ネフィリム——姿を消した巨人の痕跡

千葉 敏之

その時代、またその後までも、地にはネフィリムがいた。それは神の子らが人の娘たちのところに入り、彼女たちが彼らによって生むからである。この者たちは、昔からの勇士、名だたる男たちである。

（創世記、六章四節）

アダムに始まる人類の系譜がノアとその息子たちに至るまで語られた後の、神が大地を洪水によって粛清するノアの箱舟譚のすぐ前の位置に、この短い一節は置かれている。洪水の原因となる人間の退廃を説く文脈上にあるのだが、決して不可欠な説明という訳でもない。じつに不自然で宙に浮いたような一節であり、文意も不明瞭である。ネフィリムとは何を意味し、「神の子ら」とはいったい誰のことなのであろうか。

ネフィリムはヘブライ語で「（天より）落ちた者」を意味するが、最古のギリシア語訳である七十人訳聖書は、これを「巨人」（ギガンテース）と訳している。そして、教父アウグスティヌスは、様々な解釈を紹介したうえで、体躯が大きく武勇に秀でた種族と理解すべきだとした。

旧約聖書ではほかに、巨躯の武人として、怪力の士師サムソン（身長不明）や、少年ダヴィデが投石で斃したペリシテ人戦士ゴリアテ（六アンマ半＝二・八メートル）が登場する。また、バベルの塔の建設者とされるニムロデ（「反逆者」の意）を巨人とする伝承もあり、ダンテは『神曲』のなかで地獄の第九の圏谷、巨人たちが群がる場に登場させて、「言語の混乱」（バベル）を引き起こした罪を償わせている。

元来、巨人は神と人間の混合種として、太古の神話に語られてきた存在である。ギリシア神話では、天空神ウラノスがその子クロノスによって生殖器を切り取られた折に滴った血液が、大地神ガイアに触れることで巨人族（ティターン）が生まれた。巨人族は大神ゼウス率いる神々に挑戦し、

イタリア半島を舞台にギガントマキアーと呼ばれる壮絶な戦いを繰り広げたすえに敗れ、奈落（タルタロス）に落とされてしまう。

ユダヤ＝キリスト教でも、天使ルキフェルが神の座を狙ったために、その一党とともに天より落とされ（堕天使）、悪魔（サタン＝「誹謗者」）となったことが良く知られているが、正典の創世記にその記述はない。旧約聖書正典が確定されていく前四～後四世紀に、巨人と堕天使の記述が意図的に排除されたためである。

正典の形成期は、地中海世界において、じつに多様で創造性豊かな宇宙観をもつ宗派が噴出した時代であった。エッセネ派のクムラン文書（前三世紀末～後一世紀中頃）やグノーシス主義のナグ・ハマディ文書（後二世紀～四世紀半ば）が証言する、これら諸宗派の教説を一々論駁するなかから、ユダヤ＝キリスト教の正統信仰は次第に形作られていった。

外典とされた文書群には異端諸宗派と神話を共有するものがあったが、このうち巨人譚を詳しく伝えるのは、エノク書である。同書第六・七章によれば、地上に人が増えていくなか、見目麗しい娘たちが生まれ、これに目を付けた「天の子たち」、すなわち天使たち二〇〇名が地上に降り立ち、娘たちを嫁とした。生まれた子らは、身の丈三〇〇〇キュビト（一三五〇メートル）という途轍もない巨躯の巨人たちであった。巨人たちは人間たちが苦労して得た実りを喰い尽くすだけでは飽き足らず、地上の人間や動物も、ついには互いをも喰らい合い、血を啜り合った。こうなると、神の洪水は止むを得ない措置だと理解できる。辻褄は合っていたのだ。

外典エノク書が立脚する宇宙観は光と闇の二元論であるが、その神話のなかで天地は、ギリシア神話の人間味溢れる神々の戦いの口吻を引き継ぎつつ、光と闇とが虚栄心や欲望、嫉妬や憎悪を滾らせて交わり合う愛憎劇のなかで創造されていく。しかし、ユダヤ＝キリスト教は、善なる神（光）を絶対視し、人間との違いを際立たせ、悪魔の存在感を徹底して希薄化させることで、一神教という、当時としては異質の宗教としての教義を整えていったのである。

冒頭のネフィリム譚は、キリスト教を育んだ母胎でありながら、切り捨てられていった豊饒なる神話世界の存在を、辛うじて伝える痕跡といえる。三〇〇〇キュビトという天に届くほどの巨人の記憶を記すこの短く、宙ぶらりんの一節には、かつて天上と地上の狭間に立った希代の武人たちが、奈落の底から発する呻き声が木霊しているのだ。

ちば・としゆき　総合国際学研究院教授　ヨーロッパ中世史

文献案内
大貫隆『グノーシスの神話』講談社学術文庫、二〇一四年
関根正雄編『旧約聖書外典・下』講談社文芸文庫、一九九九年